● ミラノサローネで発表された日本のテクノロジー

インテリア関係のフェアー、イタリアのミラノサロネーの会場で話題になった原研哉氏のディレクトによる“TOKYO FIBER ’09 SENSEWAREは日本の感性とテクノロジーを融合させた挑戦的な展示であり、私の心を躍らせてくれました。六本木の21_ 21で国内発表もしましたが、新しいクリエーションを予感し興奮を受けた人は多かったと思います。一つの窓が拓かれたような気がします。

● 繊維学会関係国際会議

2009年度の繊維学会夏季セミナーのタイトルが「繊維ビジョンと“エコ”社会」でしたが繊維デザインやアートの基盤にある学術研究やテクノロジーの開発に私たちは無関心であってはならないと思います。2009年度に開催された研究発表やセミナー等の中から特に国際的な拡がりを持つものをいくつか取り上げてみたいと思います。これ等は上田市の東急イン及び信州大学繊維学部上田キャンパスを利用して開催されました。

〈第10回アジア繊維会議〉アジア繊維学会連合を母体として繊維学会が主催し、日本繊維機械学会及び繊維製品消費学会が共催しました。旭化成、帝人ファイバー、東レ、東洋紡績、ユニチカファイバー、KBセーレン等々も協力、韓国、中国、インド、イランをはじめ７ヶ国の人々が参加し、衣料用、産業用の繊維の活用等について話し合いました。会議のポストシンポジウムでは「繊維、テキスタイルサイエンス及びデザインの最前線」をテーマにスエーデン、スペイン、アメリカからも招待講演があり機能性繊維、織物、天然繊維の高品質化、スポーツウエアのデザイン、デザインへの考え方、高性能生分解性高分子の開発、ジオテキスタイルの製造技術等、様々な側面から熱心な議論が交わされました。その外〈繊維教育に関する会議〉、〈中日繊維シンポジウム2009〉、〈第４回繊維の染色・機能加工に関する国際会議〉、〈第１回アジアナノファイバーシンポジウム〉など先端テクノロジーについての発表や交換が行われ総勢550人余の参加者を得ました。併設された「疾走するファイバー展」の再現も懐かしく改めて、その面白さと先端性を再認識したのでした。

● デザインとアートの出会い

最近、デザインとアートが或る部分でクロスオーバーしてきましたが、私がその動きに現実にふれたのは1996年のSurface Design会議の時でした。“サーフェスデザイン”の言葉を起用したのはジャック・ラーセンと云われていますがサーフェスデザイン協会は、アメリカのテキスタイルデザイナー団体として会員1000人を超す組織です。開催地カンサスの地で“Museum of Arts and Design”に出合ったのです。アートとデザインは相反するものと日本では長い間対立的な存在でアートの美術館では決してデザインの展覧会は取り上げませんでした。それが、“アート&デザイン”と同じ土俵で一つの連体語となって、同じ枠の美術館スペースに取り上げられていたのです。その後、シカゴを発祥の地にファンクショナブルアート（機能を持ったアート）の動きがでました。現代アートの拠点でもあったシカゴ近代美術館で家具展を見た時も一つの驚きでした。今日、ニューヨークの近代美術館MOMAの２階はデザイン関係の展示会場になっていますし、年頭の特別展はバウハウス展をしていました。MOMAの向い側にあったクラフトミュージアムはいち早“Museum of Arts And Design”と改名しましたが２００８年１０月マンハッタンの目ぬき通りコロンブス・サークルの角に新装移転し名実共に新しい活動に脱皮しました。縦割りされ、偏見が未だ強い日本の美術界ですが、デザインとアートの両者共に人間の心に関わり生活文化を支える両車輪として認識される日も近いと思います。更にアートも生活のビジネスになる時代が来たのだと思います。

● ファイバーアートと世界の動き

ファイバーアートの分野も再び活気を帯びて来ました。2009年の１年間でもフィンランドテキスタイルトリエンナーレ、フィスカスでは国際フィンランドデザイン展と平行して国際テキスタイル展も開催されました（※2010年秋には新宿のOZONで大規模なフィンランドデザイン展が予定されています）。同じ美術館内で、フィンランド伝統テキスタイルのルイユラッグの展望展も開催されました。フランスのアンジェのテキスタイルミニアチュールトリエ